

【氏名】中島 耕三郎

【所属大学院】（助成決定時）

横浜国立大学大学院 国際社会科学部 国際開発専攻 博士課程後期

【研究題目】

国際社会における脅威認識が影響を及ぼす政策決定過程～不確実性下の学際的アプローチ～

【研究の目的】

今日の不確実性下の国際社会において、的確な安全保障政策を行うには、政策のアジェンダ設定ともいべき脅威認識に焦点をあてることが重要であり、的確な脅威認識の把握は国際社会にとって必要不可欠な事項である。そこで本研究では、脅威を認識するという観点から、国際政治学でいうコンストラクティヴィズムの捉え方を主軸におきつつも、国際政治学の枠内にとどまらず、脅威認識を広く多角的に見つめ直すために、心理学、経営学、社会学的な知見を応用する学際的アプローチに立って脅威認識の全体像を浮き彫りにし、我が国の安全保障を見据えつつ、地球規模的な安全保障を視野にいれた国際社会・脅威認識・政策の相関関係を捉える脅威学ともいべき総合的脅威認識研究を行うものである。また安全保障政策決定に関与する人々に対して、国際社会における不確実性下の的確な脅威認識把握のため学際的アプローチ思考を提供し、実効性のある実務型安全保障政策手法として学術的貢献を行うものである。

【研究の内容・方法】

本研究の学際的アプローチの位置づけは、国際政治学のコンストラクティヴィズムを主軸において、安全保障研究に利用可能な他の学問領域の知見を得つつ研究目的の探求に向かう形態をとることから、形態的分類でいう「複数的学際性」に分類できる。また、機能的分類では、実務的政策提言に結びつく政策志向型研究である、安全保障、政策決定過程における脅威認識の影響及び的確な把握に主眼を置くことから「問題解決型学際研究」といえる。構成としては、第Ⅰ章から第Ⅲ章までは、脅威認識の把握や捉え方に関する考察を主軸におき、国家や地域・国際社会がどのように脅威を認識するか、また人はどのようなものを脅威と感じるかについて、安全保障、心理学、地域学的視点を捉え、事例研究を交えて考察を行っている。第Ⅳ章～第Ⅵ章までは、第Ⅰ章から第Ⅲ章までの脅威認識の把握や捉え方に関する考察を踏まえ、脅威にどのように対処していけばよいかという考察を主軸としている。具体的には政策学の視点からアジェンダ設定として脅威認識、多主体複雑系モデルのドラマ理論の視点から脅威対処への政策推進が行きづまったことへの対応、ネットワーク理論の視点から脅威の連鎖や拡散における対処についてそれぞれの章で事例研究を通して考察を行っている。最後の第Ⅶ章では、学際的アプローチからの示唆をもとに、我が国の安全保障における的確な脅威認識の醸成に向けて、産官学連携における学際的アプローチの必要性と重要性について実務的政策提言を行った。

【結論・考察】

本研究では、脅威認識の現状、心理的考察、地域的考察を踏まえ、脅威への政策的対応、ドラマ理論的対応、ネットワーク理論的対応、そして、それらを生かすための実務的体制構築の提言という脅

威認識や脅威対処における学際的アプローチを試みた。本研究により見えてきたことは、従来の伝統的安全保障とは対称的に、非伝統的安全保障上の脅威への対処は、これまでの軍事や外交といった単一的な対応ではできず、学際的アプローチと多様なアクターの協力体制が不可欠であるということである。本研究は、非伝統的安全保障環境において、学際的アプローチの有効性とリスク志向の視点、産学官連携による学術と政策融合を構築する体制の創成が重要であり、踏み込んで言えば、脅威を視点とした、学融合の新領域創成科学ともいべき脅威学の創成の出発点の一端を示した形となった。このようなアプローチは、将来的には、抑止戦略のような国家や国際社会、または市民において共有されていた戦略思想を超えて、新たな戦略思想の創成に結びつく可能性を指摘した。